



初めての英語論文作成 ～CRSTは素晴らしい～

☆推薦文☆ *Chemical burn caused by high-concentration hydrofluoric acid: a case that followed a lethal course. Takayuki Onohara et al. Global Dermatology 2(6):215-217, 2015. DOI: 10.15761/GOD.1000157.*

この報告は、フッ化水素酸による化学熱傷がどれほど危険であるかをよく表している。救急診療で経験した貴重な症例報告である。皮膚科領域でのフッ化水素酸による化学熱傷の報告は、研磨剤の使用による手指尖部の皮膚障害など軽症なものが多く、この報告のような重症例はほとんどない。フッ化水素酸による化学熱傷自体が古くからよく知られている疾患であったため、*Journal of Dermatology*には届かなかったが、*Global Dermatology*というOnline Journalにアクセプトされた。日本語は日本人にしか通じないが、英語は世界で通用する言語であるため、やはり論文は英文で書いて世界に発信したい。著者には、この論文を契機に、今後も日常経験する症例の中から、英文論文を発表して行ってほしい。
自治医科大学皮膚科学 小宮根真弓

唐津市加唐島診療所 小野原 貴之（佐賀県 34 期卒業）

はじめまして。医師5年目、佐賀県出身34期の小野原貴之です。この度、後期研修で経験した症例報告が *Journal of Global Dermatology* に accept されましたのでご報告いたします。

私は平成23年に自治医科大学を卒業し、その後佐賀大学医学部附属病院、佐賀県医療センター好生館で初期研修を終え、後期研修を佐賀県医療センター好生館救命救急センターで1年間行いました。現在は玄界灘に浮かぶ離島、佐賀県最北端でもある、唐津市加唐島診療所に勤務しております。後期研修当時、佐賀県内でも1、2位を争う救急搬送数の病院で勤めていたこともあり、何か症例を見つけて論文文化はできないものかと考えておりました。しかし、英語で論文を執筆することはもちろん、論文の書き方、投稿の仕方など何もわかっていない状態であり、日々の診療に忙殺され、正直何も進まなかったのが現実でした。

そんな中、佐賀県内でのへき地勤務を行うため離島に派遣となり、時間的余裕が多少できたこともあって、論文作成の意欲が再燃しました。元々その存在を知ってはいたのですが、自治医科大学同窓会報、自治医大メールマガジンからCRST(Clinical Research Support Team in JMU)の情報を集め、自治医科大学のHPからCRSTに依頼させていただいた次第です。CRSTのNews Letterを拝見すると、大学時代に御世話になった諸先輩方の活躍が非常に眩しく思え、自分も頑張っって論文を書いてみようと思えました。特に大分県30期卒の佐藤新平先生は公私共に御世話になった先輩で、以降密に連絡を取らせていただくようになりました。余談ではありますが、佐藤先生はラグビー部の先輩でもあり、少し痩せられた以外は学生時代とお変わりなく、非常にアツい先輩でした。まずは代表の松原茂樹先生の執筆されておられる「臨床研究と論文作成のコツ」、「うまいケースレポート作成のコツ」を購入し、ひたすら読み漁りました。CRSTのサポート体制は本当に素晴らしく、すぐにお返事を下さり、症例報告として成立する旨の返事をいただき、自治医科大学皮膚科学教室 小宮根真弓 准教授に担当していただく運びとなりました。

このような素晴らしい体制を自分だけ知っておくのは非常に勿体無いと考え、学生時代から切磋琢磨してきた熊本県34期卒の國友耕太郎先生にも紹介し、國友先生も同様にサポートを受けることとなりました。県は違えど、お互いに切磋琢磨できる友人がいたからこそ、挫けずに論文文化できたものと考えております。



しかし、論文化までの道程は決して平坦ではなく、reject も経験しました。やはり一生懸命作った論文が reject されることは思っていたよりも精神的にショックでしたが、小宮根先生の多大なるバックアップのおかげで今回無事に accept されました。この場をお借りして御礼申し上げます。

へき地・離島にいることは時に孤独感に苛まれたり、また第一線の医療から取り残されるような焦燥感にかられることは少なからずあります。しかし、こういった形で、離島に派遣される前に目標としていた論文を執筆し、accept されるという経験ができたことはこの上なく今後の糧となったと感じております。やはり一度 accept される喜びを感じたことで、論文作成への意欲も増し、現在は私の今後のライフワークとなるであろう、離島での救急医療について現在論文作成を行っております。学生時代に言われていた「医者は一生涯勉強しなければならない」という言葉を日々噛みしめておりますが、それと同時に地域医療の楽しさも感じることができております。今後もこの経験を活かし、日々の診療のみならず論文作成など、地域から世界に発信していけるよう研鑽を積む所存です。



！！地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集！！

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介します
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先:地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

【発行】自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープン・ラボ運営委員会
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7044/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>